

早稲田大学
図書館所蔵

市嶋春城宛坂口五峰・田辺碧堂書簡紹介

池澤 一郎

はじめに

早稲田大学図書館所蔵の初代図書館長市嶋春城（安政七年～昭和十九年）宛ての坂口五峰（安政六年～大正十二年）と田辺碧堂（元治六年～昭和六年）との書簡を紹介する。坂口五峰、田辺碧堂といっても今はその名を知る人もいないであろうが、二人とも明治中期から衆議院議員を務めるなど政界で活躍する一方で、漢詩壇の盟主であった森春濤門下の双壁を成す漢詩人でもあった。

碧堂の言に拠れば、春濤は「東に五峰、西に碧堂、前途有望の好門下を獲て洵に嬉しい。元來君（碧堂）は絶句において長所を見る。絶句を貴ぶ所は神韻と風致にあるから君の如き性情の人には適するが五峰は理屈に長じてゐるから古詩大作にふさはしい、丁度芝居の女形と立役者が出来たやうなものだ」と語ったという（昭和四年新潟新聞社刊『五峰餘影』、三一頁）。また五峰坂口仁一郎は、敗戦後の昭和文壇で、織田作之助、太宰治、石川淳とともに「無頼派」などと称されて、今日も人気の衰えない坂口安吾の実父としても知られる。安吾と親しかった石川淳は昭和三十二年筑摩書房刊の『諸國畸人傳』の中に「坂口五峰」の一章を立てている。

政界、文学藝術の世界に多彩な人脈を有していた市嶋春城自身は、漢詩の制作は十代前半で廃した（前掲『五峰餘影』、一五五頁）が、その膨大な著書の随所に窺えるように、漢詩文や書画篆刻への造詣の深さは、当時においても傑出していた。市嶋も坂口も田辺も衆議院議員を務めており、政界でも市嶋と接点があったはずであるが、坂口は終生政界と関わりながらも、一貫して漢詩を作り続けており、田辺は人生半ばにして政界からは退き、漢詩と南画との研究、制作、教育に従事した。

以下に紹介する両者の市嶋宛て書簡は、専ら漢詩文や書画に関わる内容を備え、市嶋を斯界の先達として遇する敬意が文面に溢れている。両者の市嶋との関係は、五峰は莫逆といえるほど近しく、田辺は比較的疎遠であった。

市嶋が五峰の詩文集『五峯遺稿』（大正十四年刊）に寄せた跋文の「余と思道（五峰）と相ひ交はること三十餘年。趨向異然たりと雖も、その操守する所、未だ始めより相ひ同じからずんばあらざるなり。故に思道を知る者は、余に若くは莫し焉（原漢文、括弧内筆者注）」という文言には市嶋が五峰に如何に近しかったかがつくされている。

一方、田辺は春城よりはむしろ五峰に近かった。前掲書『五峰餘影』という五峰の死後、春城の協力を得て、五峰の長男献吉が刊行した伝記、追悼文集の中で三人の漢詩人の追悼文の先頭を飾るのも「詩人としての五峰」という田辺の文章である。また、春濤没後、森槐南と溝が出来た碧堂と五峰とはともに国分青厓に師事するが、『改削碧堂絶句』（大正九年文章院刊）の序にあるように、『碧堂絶句』の添削を青厓に碧堂が乞うたところ、完膚無きまでに加朱され、それがことごとく肯綮に中^{あた}つていたために、節を折って先に田辺が青厓に従い、続いて五峰が碧堂の仲介で青厓に接近した。為に、『五峯遺稿』は、館森袖海が先ず遺稿の中から詩を選び、碧堂と青厓とが更に吟味を加えて成ったもので、若い頃から五峰が得意とした長篇の古詩、特に詠史詩に本領を発揮する詩集となっていて、春濤・槐南の門下で流行した清朝風の艶麗な詩風は払拭されている。

田辺は五峰の漢詩を明治の漢詩壇で「獨歩の勢ひを示す」とまで絶賛する。春城は五峰の書を酷愛し、五峰の「能筆を煩して來訪毎ごとに近購の書畫幅の題匣を請ふことが常であつて、随つて所蔵の書畫の大半は皆匣に君（五峰）の筆蹟を留めてゐる」（『五峰餘影』一五五頁）ほどであつた。各書簡の翻字の後には、注記を挿入しつつ、原物の図版と上下対照して掲載することで、春城酷愛の五峰の見事な筆跡、また詩書画三絶にして「今山陽」の称のあつた碧堂の筆跡の妙を味わいたい。

一、坂口五峰

○六月十日付市嶋春城宛坂口五峰書簡【函イ】（請求記号 チ六・三八二二・一（三八））

拝啓、此程ハ玆らしき

品々御惠投被下、感

佩之至奉萬謝候。

いづれも小生之好物の

ものゝみにて日々鼓舌

罷在候。

詩話代金宛として別紙

為替差上申候。唯今

仕譯見當らず（紛失し

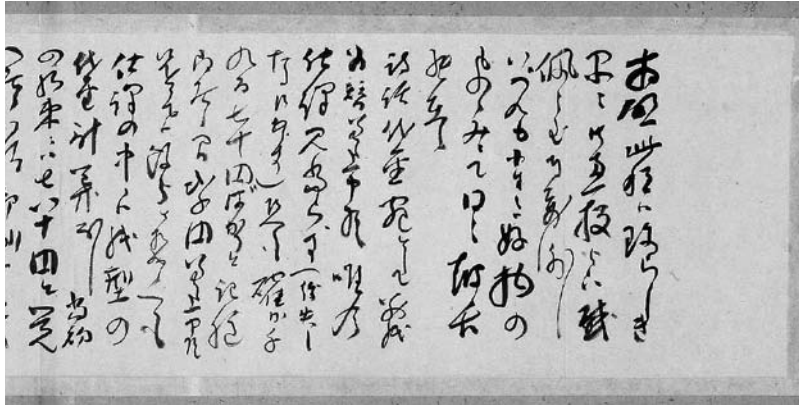


図1(1)

たるにあらず) 候へとも、確か千九百七十円ばかりと記憶致居候間、貳千円差上申候。是にてハ餘分と相成候へとも、仕譯の中にハ、紙型の代金計算致し、當初の約束二ハ七八十円と覚へ居候。同御印刷會社へ御打合の上、更ニ御返寄を願上候。それまでの間、餘分ハ御預り置被下度奉願上候。不足分ハ更ニ差上可申候。原稿保存方の義も豫て御高説を伺ひ居候會社へ御照會の上、御相纏置被下度奉願上候。製本致さんとするも、當地二ハ出來ず、御配慮を乞はざる

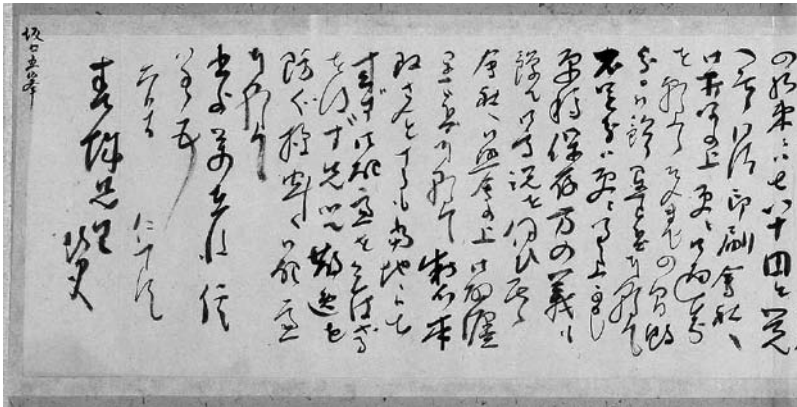


図1(2)

を得ず、先以て散逸を

防ぐ様宜しく御配慮

奉願上候。

書外萬在後信

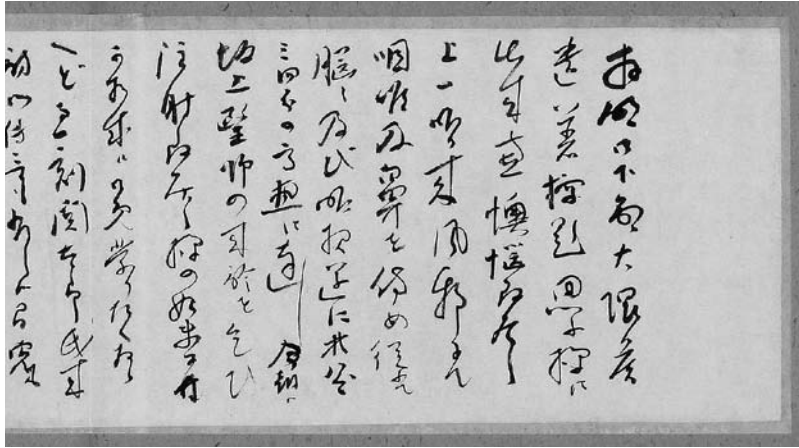
草々頓首

六月十日 仁一郎

春城先生

侍史

五峰畢生の大著『北越詩話』の印刷、製本費用を五峰が春城に為替で送付する旨を伝える書簡である。『北越詩話』は日本歴代の新潟出身あるいは新潟周辺に來訪した漢詩人の履歴行状と代表作とを摘記し、批評したものである。その特質と意義については、『北越詩話』の末に掲げられ、『五峰餘影』にも併載されている市嶋春城の『北越詩話』について」につくされている。乾坤二冊の大著の奥書は、前者が大正七年十一月、後者が大正八年三月の年記を有する。後に市嶋春城の創設に係る国書刊行会から復刊されるが、初刊の東京京橋の目黒甚七、新潟長岡の目黒十郎の共同刊行のもの出版の斡旋にも春城が尽力し

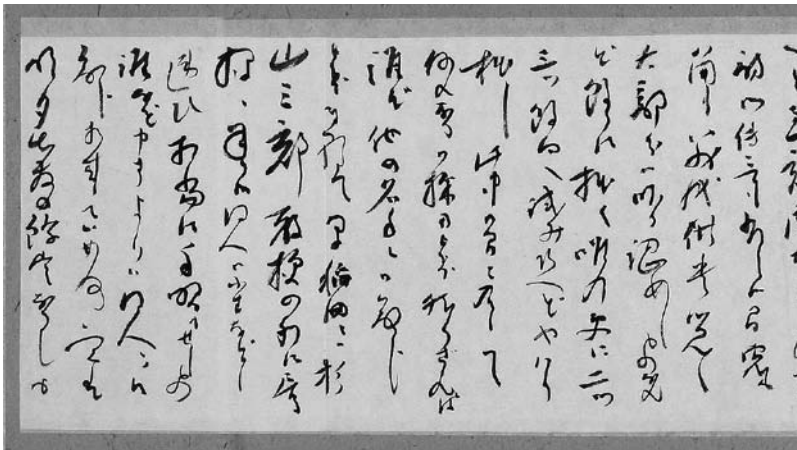


図口(1)

た消息が看取しうる文面である。文中の「印刷會社」は、刊記によれば東京牛込の日清印刷株式会社（渡邊八太郎）である（金子宏二「日清印刷株式会社の創業について」早稲田大学関係者の起業」早稲田大学史紀要二九、二三三〜二四七頁、一九九七年刊）。「製本致さんとするも當地ニハ出来ず云々」の文言から漸く出版に漕ぎつけたさまが看取されるので、乾巻が十一月に出版される大正七年の、六月十日のものと推定しておく。この年、五峰は憲政会総務となっていた。冒頭、春城から贈られた好物に舌鼓を打つ健啖ぶりに、この時期にはまだ頑健ぶりを誇っていたさまが見て取れるのは喜ばしい。

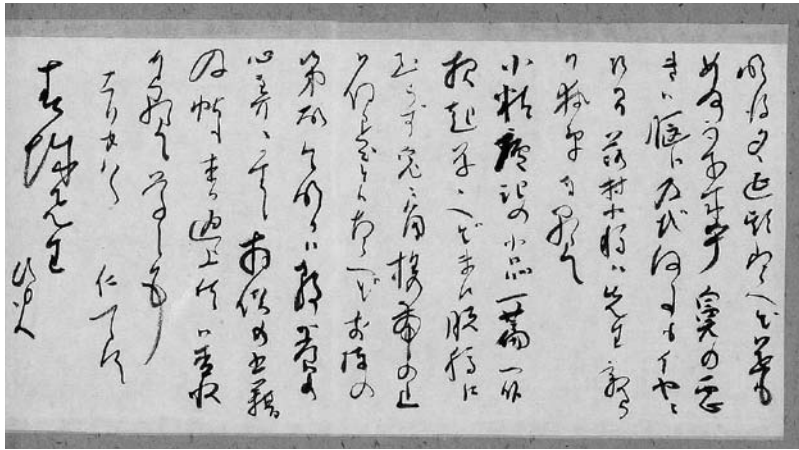
○大正十一年十一月廿八日付市嶋春城宛坂口五峰書簡【図口】（請求記号 チ六・三八一三・一（四一））

拝啓、御下命大隈侯
遺著標題、思ふ様に
出来兼懊惱致居候
上、一昨日来、風邪にて
咽喉及鼻を傷め、従ふて



図口(2)

腦二及び、昨夜遂に卅八度
 三四分の高熱に達し、今朝ハ
 坂上醫師の來診を乞ひ
 注射致居候様の始末に付、
 可相成ハ御免蒙りたく存候
 へど、過刻關太郎氏來
 訪、心待ニても有之候間、兔も
 角も別紙供貴覽候。
 大部分ハ昨日認めしものなれ
 ど、餘りに拙く、唯今更に二ツ
 三ツ餘白へ試み候へど、やはり
 拙し。此中御間ニ合候ハ、
 何れをか御採用被下度、然らざれば
 誰ぞ他の名手に御命じ
 被下度奉願上候。早稲田ニハ杉
 山三郊、教授の列に居候
 様に承り候。同人ハ小生など、
 違ひ、相當に手習もせしもの、

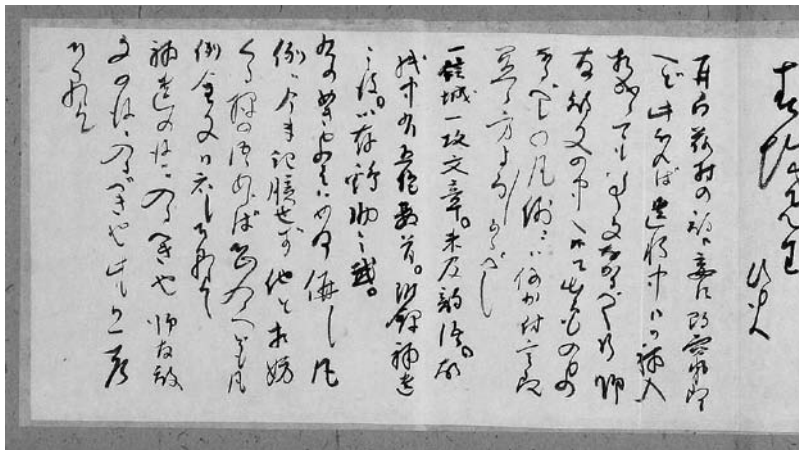


図口(3)

誰など申すよりハ、同人に御命じ相成候てハ如何。定て明夕出發の豫定なりしか明後夕ニ延期致候へども如何可相成乎。鼻の悪きハ胸に及び何事もイヤニ候間、露村小稿ハ先生親ク御執筆奉願上候。

小精盧記の小品一篇、一昨夜起筆候へども脱稿に至らず、兔に角携帶の上御同進置候ト存候へど前陳の次第故、今日明日ハ静養の心算ニ御坐候。拝借の書籍及帖も直に返上仕候。御査取奉願上候。草々頓首

十一月廿八日 仁一郎
 春城先生



図口(4)

侍史

再白、露村の詩ハ妄に改竄致候へど、此なれば遺稿中江御挿入相成候ても差支なかるべく候。師友詩文の中へ候て出色のものなるべし。○凡例ニハ何か付言致置候方、よろしかるべし。

一、信城一攻文章。未及韻語。故紙中有五絶数首。附録補遺之後。以存鷄肋之感。

右の如き處置ハ如何。併し凡例ハ今ま記憶せず。他と相妨くる様の語あらば、恐入候へども、例全文御示し奉願上候。

補遺の後二入るべきや、師友詩文の後二入るべきや、此も御一考奉願上候。

右の書簡は市嶋春城旧蔵でその書簡コレクション「朋盍手柬」中のものである。

右の書簡の日付「十一月廿八日」が大正十一年であることは、冒頭に「大隈侯遺著標題」とあることによつて特定できる。大隈重信侯が没したのは、大正十一年一月十日のことであり、一方書簡の書き手である坂口五峰が没するの
が、翌年大正十二年の十一月二日であるからである。

右の書簡は、冒頭では大隈重信の遺著の題字は春城から乞われた五峰が、折からの体調不良と高熱を發した一事を告げ、断ろうとするも、春城の懇願がよほど強く、関太郎を使者として派遣して督促させたこともあつて、病いをつとめて筆を執り、数点の題字を渡したことを記している。先述したように、春城は五峰の書を酷愛した。春城のみならず、大隈侯もまた五峰の書を愛し、その牧野謙次郎撰文の墓誌（昭和七年刊『寧靜齋文存』卷三「從一位大勳位侯爵大隈公墓誌」）の書丹は、五峰の手を煩わしたものだと言つてゐる（『五峰餘影』九七〜九八頁）。

五峰は大正九年に大病を發して以来、不調を啣つていたが、本書簡も他に比して、筆力にも衰えが仄見え、「候」「度」などの細字が他の五峰書簡よりもやや読みにくかつた。そのことを自覚してか、春城に何点かの書を与えつつも、意に満たなければ、早稲田大学の教授である杉山三郊か、その周辺の人物に依頼せよと言つてゐる。

杉山三郊は、杉山令吉のことで、安政二年に生まれ、昭和二十年に没した人で、岐阜の人である。外務省の官僚、漢詩人、書家として知られる。上京後、川田甕江、森春濤に入門し、漢学を修め、米國留学後、陸奥宗光の秘書官として活躍した。官界を退いた後には、漢詩文、書道を講じ、東京商科大学や早稲田大学で教鞭を執り、宮中でも御進講を務めるなど、書道界では権威が高かつた。

次に『露村小稿』のこととなる。文章の流れからして、これも題字揮毫のことであろう。露村とは真島信城のことである。新潟の人と推察される。明治期医学界の重鎮、入澤達吉（元治二年〜昭和十三年）の東京大学医学部教授奉職

二十五周年を大正十年に記念しての祝宴において、入澤が賦した三首の漢詩に唱和する諸家の漢詩を集めた『秋懐唱和集』（昭和二年刊）の漢文跋を落村（大正辛酉嘉平月）の年記を有する）が叙している。そこには「余と君と同庚同学なり（原漢文）」とあるから、生年は入澤と同じ元治二年（一八六五）で、やはり医学を修めていたのであろうか。また『落村小稿』は、落村の明治三十四年の年記を有する漢文集の刊本で、本文二十七丁の薄冊である。書中に「市島節齋翁の周甲を寿するの序（原漢文）」という一文があり、そこに「吾が外舅」「令嗣謙吉」などと見えるから、市嶋家の縁戚であったことが知れる。今、早稲田大学図書館所蔵市嶋春城旧蔵の刊本（二〇・四七六）を検するに、春城が五峰に依頼していたと右書簡から推察される題字揮毫は、五峰のものではなくして、明治初期啓蒙思想家として鳴った泊翁西村茂樹の筆に係る、北宋、蘇軾の「文（原文は「大略」）は行雲流水の如く初めより定質無し（原漢文）」という「謝民師に答ふる書」という文中の語が書されている。

五峰に自分で書けと言われても果せず、春城は西村に依頼したのであろう。この書簡が書かれる数年前、『秋懐唱和集』の跋を記した大正十年十二月より後、恐らく大正十一年に、落村が没して、追悼のために本書が刊行されたとすると、序文の年記をだいぶん下って、大正十二年頃に本書が刊行されたこととなる。

落村には他に『三旬紀程』という十五丁からなる鉛活字の漢文による紀行日記文がある。早稲田大学図書館蔵本（ル三・一六九八）は春城旧蔵本で、表紙裏には「春城大人一粲」と墨書されているが、これは落村の筆であり、自らこの本を春城に呈したものであることが分かる。

この紀行文は落村の子息真島中太郎が洋行するのを送るために上京したのを機に、落村が明治三十七年の五月八日から七月六日までの約三十日間の、日光、東京、京都、大阪、奈良、伊勢を経て東京に戻るといいう行程における見聞を記した紀行文である。この中太郎の洋行出発は、市嶋春城も共に見送っている。こちらの題詞は岡鹿門の筆で、跋

文は信夫恕軒である。

五峰の右の書簡は末の追伸部分で、再び『落村小稿』に触れ、五峰が改定した漢詩を「補遺」に入れるか『師友詩文』に入れるかを市嶋に判断を委ねている。凡例に入れるべき文言の文案まで五峰は添えている。春城は縁戚でもあつた新潟出身の真島信城の為に『北越詩話』の中に五峰の手で詩を引用し伝を立ててもらいたかつたのではないであろうか。しかし、『北越詩話』は既に出版されていてそれはかなわない。そこで信城の遺稿集たる『落村小稿』において詩の引用と五峰の評語を掲げたのだと思われる。

五峰の評語を読み下せば、「信城は、一に文章を攻めて、未だ韻語に及ばず。故紙中に五絶数首有り。補遺の後に附録して、以て鷄肋の感を存す」というものである。五峰の文面は、五峰が「妄改」しなくては、「出色」のできばえとはならなかつたようにも読める。五峰においてやや自負の念が強すぎると判断されるが、これも病魔のなせるわざか。刊行された『落村小稿』には末尾に一丁分の「補遺」が見えて、そこに五絶五首が収録されているが、五峰の評語は見えない。おそらくこれが五峰添削後の本文であろうが、それが市嶋の師友の詩文の中で「出色」のものかどうかはにわかには判断できぬ。おそらく本稿を読む方にとつても、真島落村の漢詩を目にする機会はこの後訪れないことを慮つて、ここに五首を訓読とともに掲げて、市嶋の亡友への真情を看取するよすがとする。

酔後揩雙眼 酔後 双眼を揩かげば

一枝梅報春 一枝梅 春を報はず

箇中閑富貴 箇かく中 閑富貴

不識世酸辛 世の酸辛を識しらず

「問居」其の一

半生成底事 半生 底事をか成せる

依然捫虱人 依然として虱を捫する人

問吾々不答 吾れに問ふも 吾れは答へず

一笑臥青茵 一笑して 青茵に臥す

「問居」其の二

曾見丹青妙 曾つて見る 丹青の妙なるを

還知俳句工 還た知る 俳句の工みなるを

奈何名總拙 奈何んぞ総拙と名づくる

風韻在斯中 風韻 斯の中に在り

「呈總拙宗匠」

傲骨不求世 傲骨 世に求めず

深藏淵底龍 深く藏す 淵底の龍

惜君老陋巷 惜しむらくは君陋巷に老いて

文墨日相從 文墨 日々相ひ從ふを

「寄友人蟄龍」

詩酒却招病 詩酒却つて病を招き

蒼然顔色衰 蒼然 顔色衰ふ

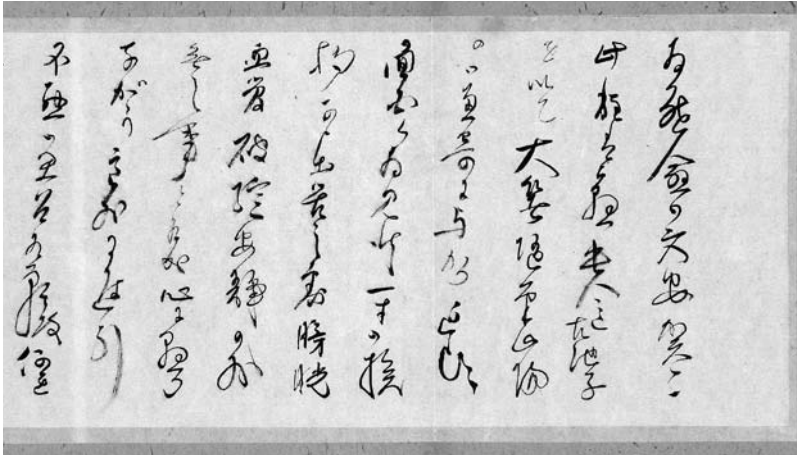
如今無一事 如今 一事無く

彷彿老禪師 彷彿たり 老禪師

「病中作」

書簡本文に戻ると、『露村小稿』の後には、「小精廬記」のことが記されている。

『五峰餘影』の中の春城の「追憶記」に、「小精廬記」について詳しい経緯が記されている。それは「私（春城）がしきりに寸珍本を集めてゐる頃、君（≡五峰）には堂號を命ぜんことを頼んだ。君は沈吟の後、大にして粗ならんよりに小にして精なるに如かずとも言ふから「小精廬」はどうかと云はれた。私も五峰君と共に印癖があるので、小精の二字はこれに適ふ所から、喜んでそれを堂號にし、君に扁額の揮毫を請ふたのが今も書室に掲げてある。君は十數枚揮毫され、どれでも選べと持參されたのを見て一驚を喫したことがある。亦廬記も作らうと言はれたから是非にと頼んだが、これは其の稿を私に示されない内に歿せられた。歿後草稿類を調べて見ると記の初稿らしいものが出て來た。推敲中であつたことがわかる。そこで私は其草稿を館森袖海氏に回はして多少の雌黄を加へて貰つたものが左の一文である。これは五峯遺稿に洩れてゐるから、爰に其全文を掲げる」というものである。春城は『五峯遺稿』からは脱漏しているとするが、大正十四年の刊本の『五峯遺稿』下の二には「小精廬記」が二丁裏から三丁裏に亘つて確かに



図八(1)

収録されている。春城の記憶違いであろう。さらに現在早稲田大学図書館には「拙廬記三篇」と題する卷子本（イ四・一九一九・九〇二）が蔵されていて、五峰の「小精廬記」の他に、落村真島信城の撰した「小精廬記」と晚香菊池武貞の撰した「不律庵説」が、いずれも春城自身の筆で書き綴られている。この三者の文、特に少許の異同のある五峰の三種類の「拙廬記」の本文を比較検討することは、興味深いことであるが、紙幅の関係上、別席での話題としよう。

○大正十四（十二年）四月十五日付市嶋春城宛（坂口五峰）書簡【図

八】（請求記号 千六・三八二二・一（四四））

拝啓、愈御文安賀々候。

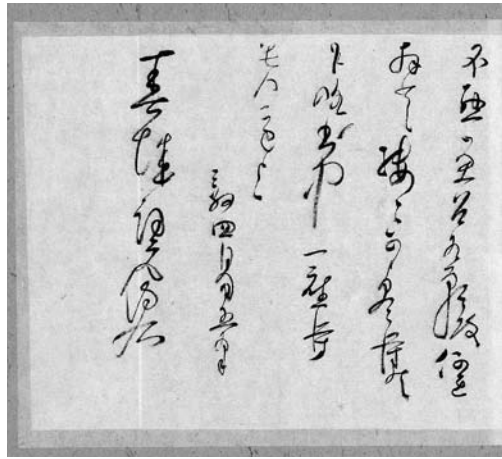
此程は被懸貴意、古池子

を以て大著随筆山陽

の御惠寄に与かり、追ひく

御面白く拝見仕候。一寸の挨拶

可申出答之處、膀胱



図ハ(2)

血管破綻、安静の外

無之事と相成心に懸り

ながら意外に遅引、

不悪御思召相願度、何れ

拝首縷々可申盡候得共、

乍略書中一應可得

貴意申候。

三拜四月旬五筆

春城詞兄

侍右

本書簡もまた春城の書簡コレクション「朋盃手束」の中のものであるが、内容から坂口の手に係るものであるかどうか疑問が存する。

本書簡は、市嶋春城からその著書『随筆頼山陽』を寄贈されて、その礼状の投函が遅くなったことを詫びる内容である。「拝見」しているとは言いが、折からの「膀胱血管破綻」という難病からなかなか卒読には至らなかつたのであろう。『随筆頼山陽』は好評につき版を重ねた著書のようなのだが、早い時期の出版は大正十四年三月と十五年六月の刊記を有する早稲田大学出版部のものである。後者は訂正増補版である。ただし、この刊記の日は大正十二年十一月二日の五峰逝去の日の後に属するので、実際には二年近く前には既に製本がなされていて、春城はそれを近い友

人には送付したという実情がなくてはならぬ。出版には刊記の日時と数ヶ月のずれがあることはあるにせよ、二年というのは考えにくく、右書簡には坂口仁一郎の署名も見えないから、別人の筆に係るものとしたい。別人の筆に係るものが、字体の類似から五峰のものと判断されたのであろうか。あるいは、末の日付の「五筆」を「五峯」と読んだのであろうか。併しながら、対等なあるいは目上の相手への書簡において、号を署名として用いることは異例に属する。鷗外森林太郎の書簡、漱石夏目金之助の書簡は、いずれも「林」「金」「林太郎」「金之助」と署名されており、対等以上の相手に宛てた書簡に「鷗外」「漱石」と署名したものは絶無である。

別人のものならば、素直に随筆『頼山陽』初刊の大正十四年四月十五日のものとするべきである。もしあくまでも右書簡が坂口のものだとすると、その執筆年次は、その重篤な病状から晩年のものと推定され、それは逝去の年の大正十二年四月十五日となる。いずれにせよ、誰の書簡であるかは、博雅の示教を待たなくてはならぬ。

二、田辺碧堂

○七月十四日付市嶋春城宛田辺碧堂書簡【図二】（請求記号 千六・四六二〇・一四（四））

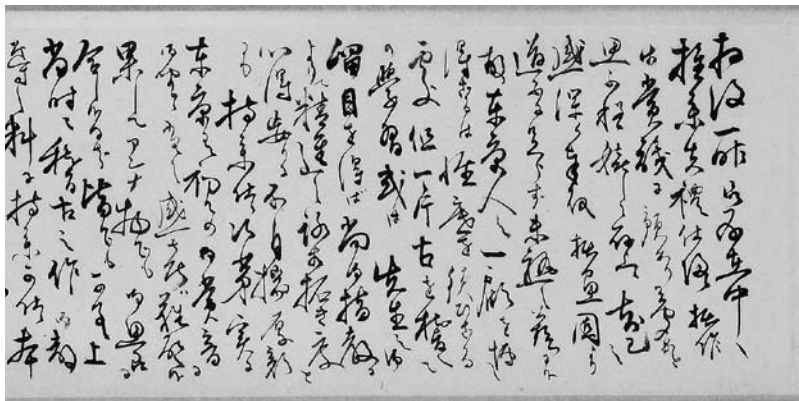
拝復。一昨御不在中へ

推參失禮仕歸候。拙作

御賞識に預り、夢かと

思ふ程嬉しく存上候。知己之

感、深く奉存候。拙畫固より



図二(1)

道ふに足らず、未熟之藝に候

故、東京人之一顧を博し

得ざるは怪底を須ひざる

處、但一片古を稽へて

の學習、或は先生之御

留目を得ば尚御指教に

よりて精進之路相拓き度と

心得、妄りに不自揣、厚顔

にも持參仕候次第、實に

東京にて初ての御賞音に

御坐候。小生之感喜ハ難啓候。

果してアンナ物でも御思召に

合し候得ば、皆でも可差上、

尚時々稽古之作、御教

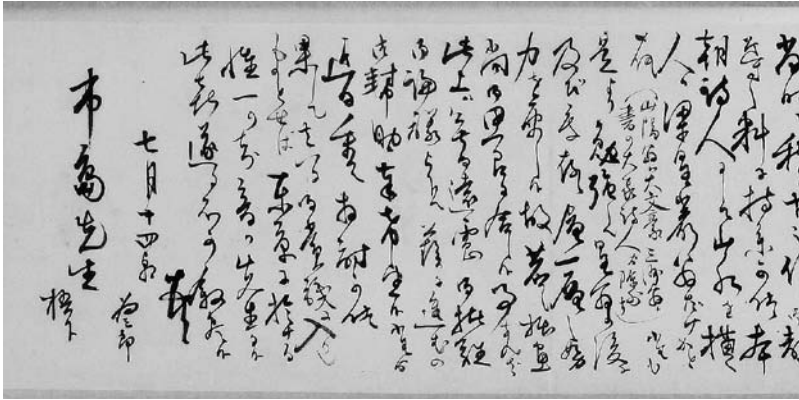
導之料に持參可仕候。本

朝詩人にして、山水を描く

人ハ、梁星巖翁だけかと

存候。(山陽翁ハ大文豪、三洲翁ハ小生も

書ノ大家、詩人ヲ除外ス)



図二(2)

是より勉強して星翁の後に

及び度存候。層一層之努

力を要し候故、若し拙畫

尚御思召に合し候事あれば、

此上ハ無御遠慮御批難

御論議被下て藝に進むの

御幫助奉希望候。小生も

近日重て拝謝可仕候。

果して真に御賞識に入り候

ものとせば、東京に於ける

惟一の知音か先生に候。

此喜遂に不可叙盡候。

頓首

七月十四朝

為三郎

市島先生

梧下

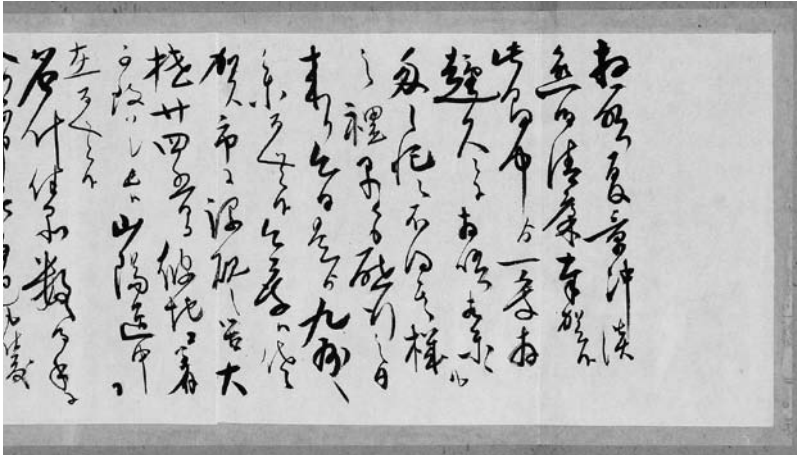
本書簡は市嶋春城の書簡コレクション「市嶋春城蒐集名家書簡集」の一である。

前項で紹介した五峰の書簡が、どれも胸襟を打ち開いた印象があるのとは違い、碧堂の書簡には、春城を書画鑑定に眼識のある東京の名士として敬意を以て遇する一定の距離感が存することは否めない。碧堂が自ら作成した山水画を春城不在中に持参し、その札状に絶賛の言があったかのごとくで、碧堂の感激抑えがたいものがあつたことが文面に溢れている。

中に就いて、日本歴代で漢詩人にして山水画の名手は梁川星巖だけであるとしている碧堂の言は傾聴に値する。近世から近代にかけての文人画家、南画の作り手はほとんどが自らの作品に落款、題詩、題辞を認めるために、画技に加えて、書を嗜み、漢詩を作ったわけであるが、その中で漢詩人として認められるのは梁川星巖のみであるところである。文学史では、漢詩人としての梁川星巖は、頼山陽の後塵を拝する者とするのが一般であるが、山水画の技量品格は、むしろ山陽が星巖に一籌を輸するということは、両者の山水を見比べたものには確かに首肯できる見解であろう。漢詩人碧堂は、山水画、南画の復興を鼓吹し、多くの作品を物し、実物の縮印画集として『碧堂先生山水畫冊』（大正十五年刊）、『碧堂先生畫觀』（昭和三年刊）を刊行している。また日本歴代の書画を収集、研究していたことが、大正六年二月十六日付喜多橋園宛書簡に徴しうる（拙稿「書画会の盛況に見る大正漢詩人の雅交」、『早稲田大学文学研究科紀要』二〇一九・三）。

○大正六年五月十九日付市嶋春城宛田辺碧堂書簡【図ホ】（請求記号 千六・三八二・一（三二））

拝啓、夏景冲淡



図ホ(1)

愈御清榮奉賀候。

此間中より一度拝

趨久々に拝晤相樂候も

勿々忙々不得其機

之裡、早くも遊行之日

来り、今日はより九州へ

参るべく候。今度八佐

賀市に設硯候筈、大

抵廿四日に、彼地に着

可致ベケレバ、山陽道中

在るべく候。

名仕佳品数々御手に

入り可申候。拝見も仕度

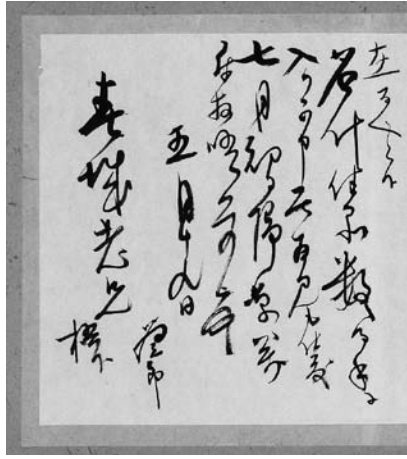
七月初日帰京候。萬

付拝晤可申上。頓首。

五月十九日

為三郎

春城老兄



図ホ(2)

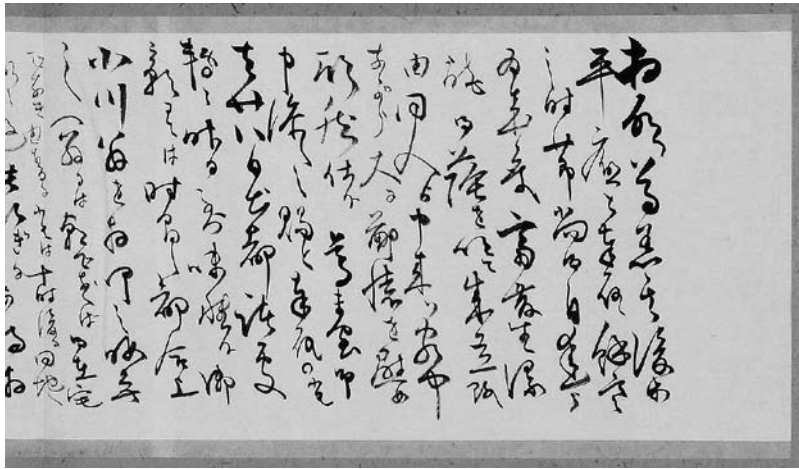
梧下

手されたのではないかという口吻である。碧堂と春城とが対談する折には、春城が収集したあまたの書画が展覧されて、雅興を添えていたことが髣髴とする。

○二月六日付市嶋春城宛田辺碧堂書簡【図ヘ】（請求記号 チ六・三八二二・一（一九））

拜啓。尊恙其後御
平癒と奉存候。餘寒
之時節、尚御自愛被

早稲田大学 市嶋春城宛坂口五峰・田辺碧堂書簡紹介
図書館所蔵



図へ(1)

爲成度候。斎藤生演

能、御蔭を以て成立致候

由、同人々申來、御客中

ながら、大に鄙懷を慰め

欣然仕候。尊臺御

申添へ之賜と奉存候。○小生

去廿八日出都諸處

轉々、昨日到味野候。御

願にては、時間之都合上、

小川翁を拜叩之暇無

之（翁には朝でなくば御在宅

はなき由なるに、小生は十時後に同地へ

到候故）此の次ぎに可濟拜

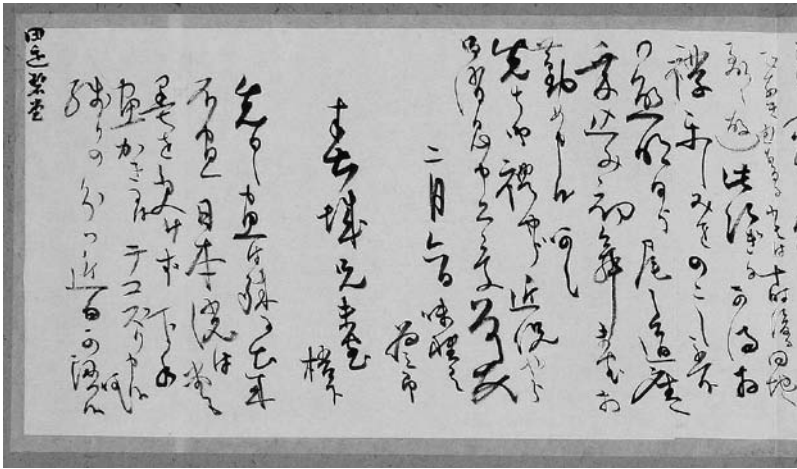
禮樂しみをのこし置候。

○愈明日夕尾之道座へ

乗込み初舞臺相

勤め申候。呵々。

先者御禮やら、近況やら



図ハ(2)

御消息申上度、草々頓首

二月六日味野にて

為三郎

春城先臺

梧下

先日の晝は殊に出来

不宜、日本統は尚も

墨を受けず、下手

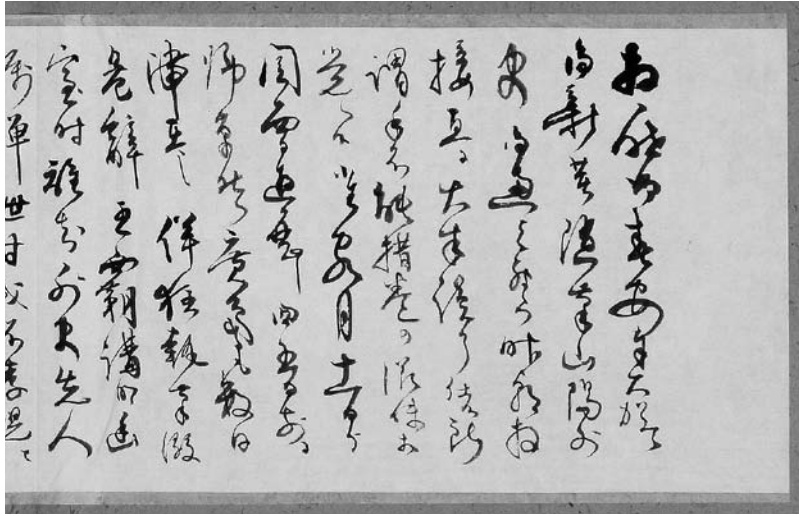
晝かきにはテコズリ申候。呵々。

残りの分ハ近日可認候。

本書簡も「雙魚堂鶏肋」の一である。

署名の前には「味野」とある。現岡山県倉敷市の味野である。

碧堂は岡山の人であり、土地勘があった。岡山には後樂園があり、後樂園には能舞台が古くからあった。話題は能楽のことに終始する。寒気が続く中、春城の病状を慮る文言から始まる。田辺と近い「斎藤生」なる者が東京での能舞台に無事に立てたことが、春城の助言斡旋によるものであることを冒頭に謝している。



図ト(1)

その後、味野に到着したことを報じ、やはり能楽関係者と思しい「小川翁」を訪うも、不在故に面晤を果たさざりしことを報じる。最後に自らが明日二月七日に尾道座で初舞台を踏むことを報じている。碧堂自身も能楽に関心が深く、自らも謡い舞ったのであろう。

追伸に東京出発前に市嶋に呈上した画は不出来であったと謙遜し、それを少しく絵具を弾く画絹のせいに帰している。冒頭に掲げた市嶋に初めて自画を呈して絶賛を博して後に、陸続と市嶋に望まれるままに、画作を送っていた様が髣髴とする。市嶋コレクシヨンの中に碧堂の山水画がどれほど所蔵されていたのか、一度調査の必要があるように思う。

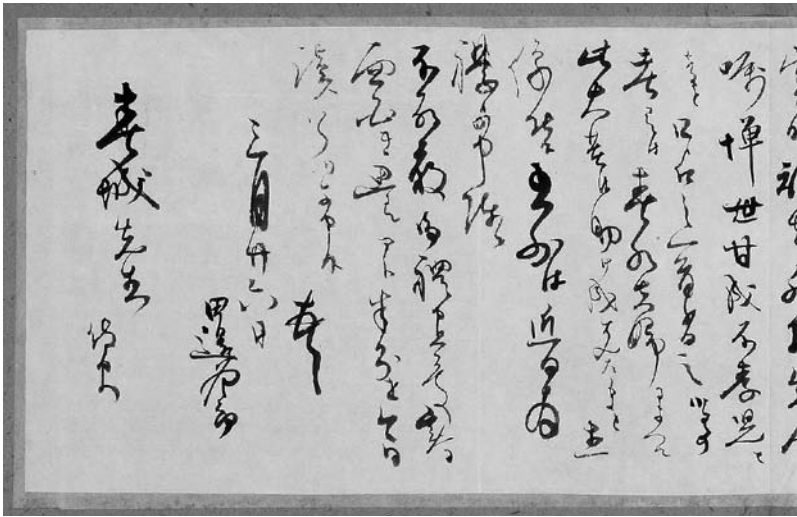
○大正十四年三月廿六日付市嶋春城宛田辺碧堂書簡【図ト】

(請求記号 千六・三八二・一(二〇〇))

拝啓、御春安奉大賀候。

御新著随筆山陽外

史御恵ミ被下、昨朝拝



図ト(2)

接、直二大半讀了仕候。所

謂手不能措卷の滋味相

覺へ候。小生客月十一日分

關西に遊歴し、四五日前に

歸京仕候。廣島にも數日

滞在申候。佯狂執筆溺

危辭、王霸講明幽

室時。難知外史先人

囑、憚世甘成不孝兒と

ありし口占之一首有之。小生の

考にては、春水夫婦によつて

此大著は助け成されたと想

像仕候。書外は近日拝

禮可申陳候。

不取敢御禮申上度、實に

面白き思にてアト半分を今日

讀了り可申候。頓首

三月廿六日

田邊為三郎

春城先生

侍史

本書簡も「雙魚堂鷄肋」の中の一柬である。

市嶋春城著『隨筆頼山陽』の初刊の刊記は大正十四年三月十日である。その日付通りに刊行され、碧堂の許にも一本届けられたとすれば、ほとんど時日を置かずに認められた礼状ということとなる。先に五峰の書簡中とされるものの中に署名なきゆえに存疑のものがあつたが、それをあくまでも五峰の物とする場合、『隨筆頼山陽』が大正十二年に既に刊行されていた可能性があることを臆測として述べたが、ここでは一応その臆説を撤回し刊記通りに刊行されたものとしておく。「所謂る手巻を措く能はず」という語句で絶賛する。碧堂は、詩書画において高い評判を博して「今山陽」とも呼ばれていた故に、山陽に関しては一家言を有していたこととくである。その一家言は「小生の考へては」として『日本外史』完成の裏には春水夫婦の援助が甚大であつたというもので、それは自作の七言絶句に凝縮されている。

碧堂の漢詩集には『碧堂絶句』『凌滄集』『衣雲集』があり、多くの漢詩雑誌や新聞にその作が掲載されているが、この作を未だ見いだせない。左に録して碧堂の山陽への一家言を窺う所以である。

伴狂執筆溺危辭 伴狂筆を執りて危辭に溺れ

王霸講明幽室時 王霸講明す幽室の時

難知外史先人囑 知り難し外史は先人の囑なるに

憚世甘成不孝児 世を憚つて甘んじて不幸の児と成る

大意を記せば、山陽が『日本外史』を執筆したのは、脱藩行為の故に自宅の座敷牢に幽閉されていた時のことといふ。世間的には狂気を発したかのように見せかけて、華麗なる文辞を駆使して日本の通史を書き綴り、王道覇道の別を明らかにした。『日本外史』執筆は父春水の嘱望慫慂助言があつて始めてなつたもので、その完成こそが孝道の精華であつたのに、俗物どもの中には理解者を求めずに世間が不孝の子と言うにまかせたのであろう、といったところ。転句が解しがたいが、文面の「小生の考へ」を盛り込んだ詩句と解した。

筆者自身も『随筆頼山陽』を一読し、その暢達な筆致を楽しんだ。しかしやや痛痒を感じた一事は、『日本外史』の中の南北朝正閏論やその執筆の背景ではなくして、永遠の恋人と目される美濃大垣の閨秀詩人江馬細香との関係を論じたくだりである。市嶋は現在に至るまで跡を絶たない山陽と細香とは男女関係にあつて、子までなしたという流説に与するがごとくであるが、山陽と細香との詩文、細香周辺の漢詩人の詩文を読めば、それが俗物の僻見であつたことが感得される。ここでは山陽雪冤のために、細香の門下でもあつた天江江馬聖欽の『退享園詩鈔』（明治三十四年、京都江馬達三郎刊）巻一から「哭細香女史（細香女史を哭す）」の一首を瞥見しておきたい。

貞静 誰か知らん 女史の賢なるを

楝花紙帳只孤眠 楝花の紙帳 只だ孤り眠る

畢生辜負鴛鴦枕 畢生辜負す 鴛鴦の枕

匹似清修枯木禪 匹似す 清修枯木の禪

転結句の「畢生辜負す鴛鴦の枕、匹似す清修枯木の禪」というのは、細香が終生男と同衾したこともなく、清廉に身を処した尼僧のような生涯であつたことを詠じるにほかならない。

(追記)

本稿は二〇一七年度科研費助成挑戦的研究(萌芽)「近世から近代にかけての日本の書簡文の研究」(17K18763)の成果の一部である。書簡の翻字に際し、誤読の箇所数点について、岩田秀行氏、小池直氏の高教に接した。記して謝意を表す。

(いけざわ いちろう 文学学術院教授)